

## 日向における近世土師器の出土事例

堀田 孝博

（宮崎県埋蔵文化財センター）

### 1 はじめに

筆者は以前、宮崎平野部の土師器杯・皿を主な対象として、それらの使用および廃棄・埋置などの時点における同時存在を検討して一括遺物を抽出し、編年を試みたことがある。資料的限界も多分にあり、各時期の年代幅は約 30 ～ 130 年程度と広く粗いものにとどまったが、8 世紀末から 17 世紀までの一応の編年案を提示した（堀田 2012・2016）。ただし、16 世紀末に始まる第 XⅡ期の下限を明確に示すことができなかったため、17 世紀以降に属する近世土師器の出土事例について関心を持ってきたが、残念ながら後続の編年案を検討できるほどの十分な資料数は今のところ得られていない。そこで、筆者の管見に触れた注目される事例を紹介し、今後の資料増加を期待しつつ、当面の発掘調査や報告書作成等に資することとしたい。

### 2 出土事例の概要と帰属年代の推定

これまでの拙稿では、対象を宮崎平野部に所在する遺跡に限定していたが、本稿では県内全域の遺跡を対象とし、できるだけ多くの出土事例について紹介する。

#### （1）延岡城内遺跡（第 3 次）

延岡城の大手口である城の北側に近接する武家屋敷地の調査であり、近世には延岡藩領の中枢部に位置する。石垣遺構・井戸遺構・溝状遺構などとともに土壌 4 基が検出され、廃棄遺構と推定されている。このうち土壌 4 からは多量の陶磁器類や土師器が出土し、54 点の実測図が掲載されている（延岡市教委 2002）。廃棄行為により形成されたと考えられる資料群である以上、同時に使用されていた個体の抽出は困難であるが、陶磁器類 36 点の年代は 16 世紀末～17 世紀代に収まり、肥前磁器の荒磯文碗・色絵碗・芙蓉手皿、肥前陶器の呉器手碗など、17 世紀後半代のものが目立つ。土師器は杯 16 点、小皿 2 点の計 18 点が掲載され、うち杯 6 点が完形ないしほぼ完形である。法量は杯が口径 10.7 ～ 11.8 cm、底径 5.4 ～ 6.8 cm、器高 2.4 ～ 3.1 cm で、小皿が口径 6.6 ～ 8.4 cm、底径 4.0 ～ 4.6 cm、器高 2.3 ～ 2.4 cm で、ほぼ全点が糸切り底である（図 1）。

土壌 4 は底面に近い 8 層中に腐植土が多く混入し、ある程度の期間開口していた可能性がある。また 2 層と 8 層には大量の炭化物・焼土粒が混入する一方で、7 層は炭化物が少ないなど、短期間での埋没を想定しづらい。全ての遺物について出土位置や層位を精査することで、少なくとも廃棄における一括性の確認は可能と思われるが、その作業に至っていない。ただし、上述したように掲載された陶磁器類には 18 世紀代に下るものが含まれず、土師器類の形態や法量がよく揃うことから、現時点では 17 世紀後半代に属する可能性が高い資料群と考える。

#### （2）延岡城内遺跡（第 39 - 2 次）

第 3 次調査地点から北西に約 130 m 離れた位置にあり、やはり武家屋敷地である。トレンチ 3 箇所の調査であるが、トレンチ 2 で検出された廃棄土坑から出土した土師器・陶磁器類 40 点の実測図が掲載されている（延岡市教委 2017）。磁器碗は肥前産と考えられる腰が張り高台の低い丸碗が主体をなし、いわゆる望料碗も含まれるが、広東碗や小広東碗は 1 点も見られない。陶器碗では京・信楽系の半球碗と小杉碗があるが、小型の端反碗はやはり 1 点もない。小杉碗は口

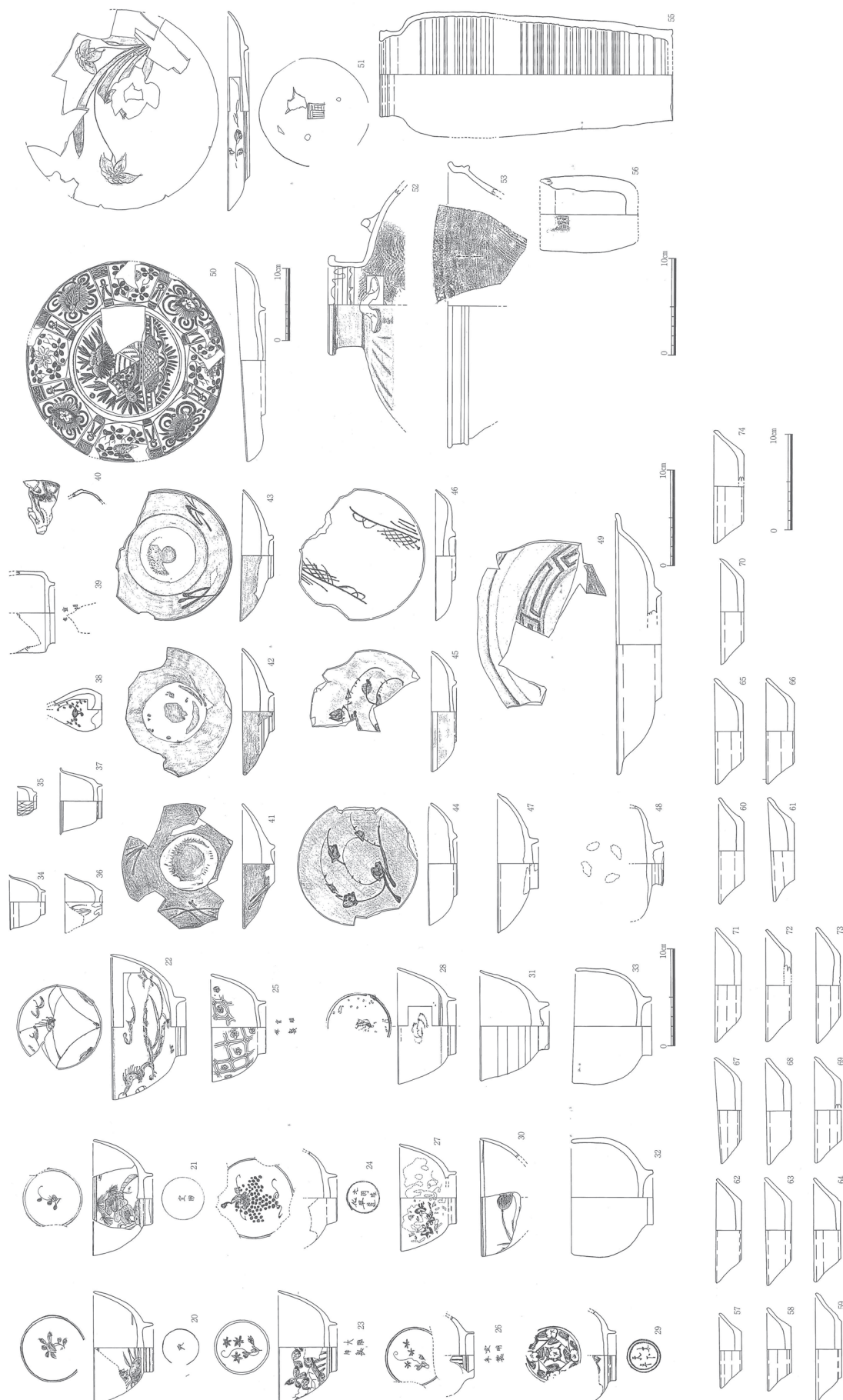


図1 延岡城内遺跡(第3次)土壇4出土遺物(S=1/6, 50のみ S=1/8)

径 10.0 ～ 10.6 cm とやや大ぶりで、若松文は簡略化しつつも松葉の表現が残っている。上記の点を総合すると、18 世紀中頃を中心とし、第 4 四半期までは下らない年代が導き出される（九州近世陶磁学会 2000、鈴木 2001、畑中 2003）。土師器は杯 3 点、小皿 2 点の計 5 点が掲載され、全て完形ないしほぼ完形である。法量は杯が口径 9.5 ～ 10.0 cm、底径 4.2 ～ 5.0 cm、器高 1.9 ～ 2.2 cm、小皿が口径 6.4 ～ 6.5 cm、底径 2.8 ～ 3.2 cm、器高 1.1 ～ 1.3 cm、全点が糸切り底で、うち回転方向の判別できる 3 点は右回転糸切りである。掲載番号 9・10 は施釉されている（図 2）。

報告書によると、出土遺物は一括廃棄されたものと評価されている。掲載された遺構実測図や写真から埋没過程を検討することは難しいが、上述したとおり陶磁器類の年代がよく揃い、土師器類の形態や法量も共通性が高い。そして、写真図版によるとほとんどの資料が完形に復元されている。第 3 次調査の土壌 4 と同様に、同時使用個体の抽出は困難ながらも廃棄における一括性の確認は可能と思われるが、現時点では 18 世紀中頃に属する可能性が高い資料群と考える。

### （3）中山遺跡

日向市大字塩見字上ノ坊に所在する。中世日向北部の拠点城郭である塩見城跡の南端部に位置するが、中世の遺構は明確ではなく、23 基の墓穴と 28 基の墓石が検出されている。それらは副葬品や墓石の紀年銘から 17 世紀～ 19 世紀末のものと判断され、近世を通じて墓地が営まれていたようである。塩見を含む日向市域の多くは近世初期には延岡藩領であったが、1692（元禄 5）年に有馬氏が越後国糸魚川に転封されて後は幕府領となった。これらの近世墓のうち、S X 21 の墓穴内から土師器小皿 2 点が出土している（宮崎県埋文セ 2004）。掲載番号 24 が 1 / 2 強の破片で口径 8.25 cm、底径 4.3 cm、器高 1.5 cm、同 25 が 1 / 2 弱の破片で口径 6.8 cm、底径 2.6 cm、器高 1.6 cm に復元されている。どちらも糸切り底で、24 は右回転糸切りである（図 4）。

報告書掲載の写真図版を見ると、S X 21 および隣接する S X 22 の台石・敷石は原位置を保つ

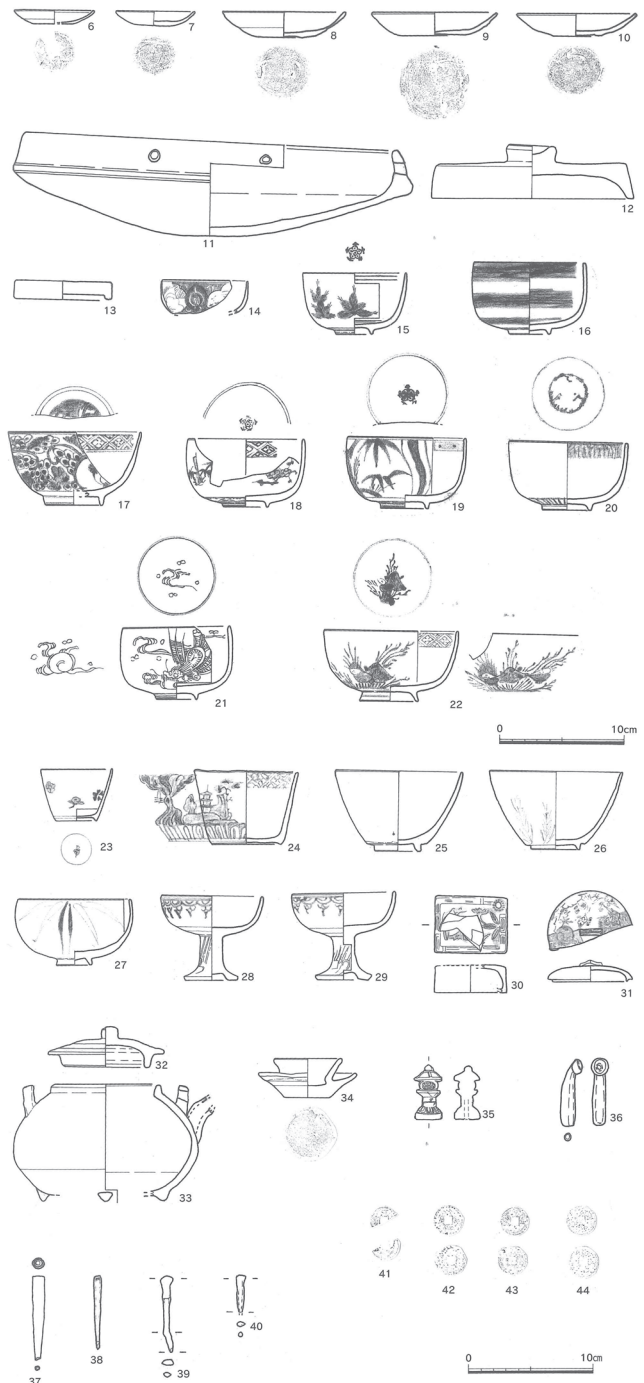


図 2 延岡城内遺跡（39-2 次）トレンチ 2 廃棄土坑出土遺物（S=1/6）

ている可能性が高い。墓穴が墓石の設置箇所より後ろにずれているのは、これらが逆修墓であることに関係するかもしれない。上述したように資料の残存状態が良くないので、墓の副葬品とは考えづらく、使用または埋置の同時性は認めたいが、墓穴の埋め戻し時期を下限とすることはできる。S X 21 の墓石は破損により没年を確定できないが、報告書では墓石 28 基のうち S X 21・22 の 2 点のみが同一型式（駒形）で、S X 22 の没年が 1736（享保 21）年であることや、大分県女狐近世墓地の調査成果（大分県教委 1996）などから、当該型式の帰属年代を 1720～30 年代と推定しており、これらの土師器小皿は 18 世紀前半頃に属する可能性が高いと考える。

#### （４）宮ノ東遺跡

西都市大字岡富に所在する。近世段階は岡富村にあたり、延岡藩領を経て 1692（元禄 5）年に幕府領となった。旧石器時代から近現代まで夥しい量の遺構・遺物が確認されたが、そのうち集石墓とされる S 3222 から土師器小皿が 4 枚重なった状態で出土している（宮崎県埋文セ 2008）。法量は口径 5.2～6.0 cm、底径 3.0～3.4 cm、器高 1.0～1.1 cm で非常に小さい。報告書には全て施釉されていると記されているが、掲載番号 4981・4982 は内面から口縁部外面にかけて明瞭に透明釉がかかるものの、同 4983・4984 には透明釉はかからない。胎土は淡褐色だが器面の一部が橙褐色を呈する部分があり、塗土のようなものかもしれないが、少なくとも 4981・4982 と 4983・4984 とは別種と判断できる。全て右回転糸切り底である。胎土は赤色粒子を少量含み、在地の土師器に類似する（図 4）。

4 枚が重ねられていたので、使用や埋置における同時存在は確実である。報告書では 17 世紀代に位置づけられているが、江戸遺跡において透明釉を施した土師器小皿が出現するのは 18 世紀後葉以降とされており（小川 2001）、本事例も 18 世紀後葉以降と捉えておきたい。

#### （５）佐土原城跡（第 6 次）

佐土原城の築城年代は明らかではないが、南北朝期に伊東氏の庶流である田島氏が築城したとの伝承があり、その後は伊東氏・島津氏の拠点城郭として存続した。近世段階には山下の二ノ丸に藩庁が設置され、佐土原藩領の中核部であり続けた。調査地点は『日向国佐土原城』（国立国会図書館所蔵）によると三ノ丸、幕末の城下を描いた『佐土原御城下細見之図』（宮崎県総合博物館所蔵）によると、佐土原藩の寄合格である渋谷直記および騎馬格である郡司篤之助の屋敷地に相当すると考えられ、発掘調査の結果、溝状遺構に区画された屋敷地の中に多数の建物跡・井戸跡・土坑などが検出された（宮崎市教委 2016）。多くの遺構から遺物が出土しているが、そのうち渋谷氏土坑 54・91・121・146 は土師器と陶磁器類が共に出土しており、ある程度の年代推定が可能であると判断した（図 4）。

渋谷氏土坑 54 からは多くの遺物が出土したが、密集するような状況ではなかったとされる。ただし、検出面からの深さは 0.24 m で埋土は 3 層に分けられており、土層注記や調査時の写真によると遺物のほとんどは最上層の 1 層から出土しているようである。報告書に陶磁器類 8 点と土師器 4 点が掲載されているが、磁器は徳化窯産と考えられる型成形の白磁碗のほか、肥前磁器では見込みに手描の五弁花がある小皿や二重格子目文に見込蛇ノ目釉剥ぎの皿などがあり、陶器は京・信楽系の半球碗やせんじ碗があり、18 世紀中頃を中心とする年代が想定できる（九州近世陶磁学会 2000、鈴木 1999）。土師器は焙烙 1 点のほかに杯 3 点が掲載されるが、完形の個体はない。法量は口径 10.2～12.5 cm、底径 5.0～6.4 cm、器高 2.0～2.4 cm で、底部の完存する 2 点は右回転糸切り底である。形態は底部が厚く口縁部へ向かって先細る掲載番号 423 と底部から口縁部まで厚さがほとんど変わらず、底体部間の屈曲が明瞭ではない同 424・425 とに二分される。



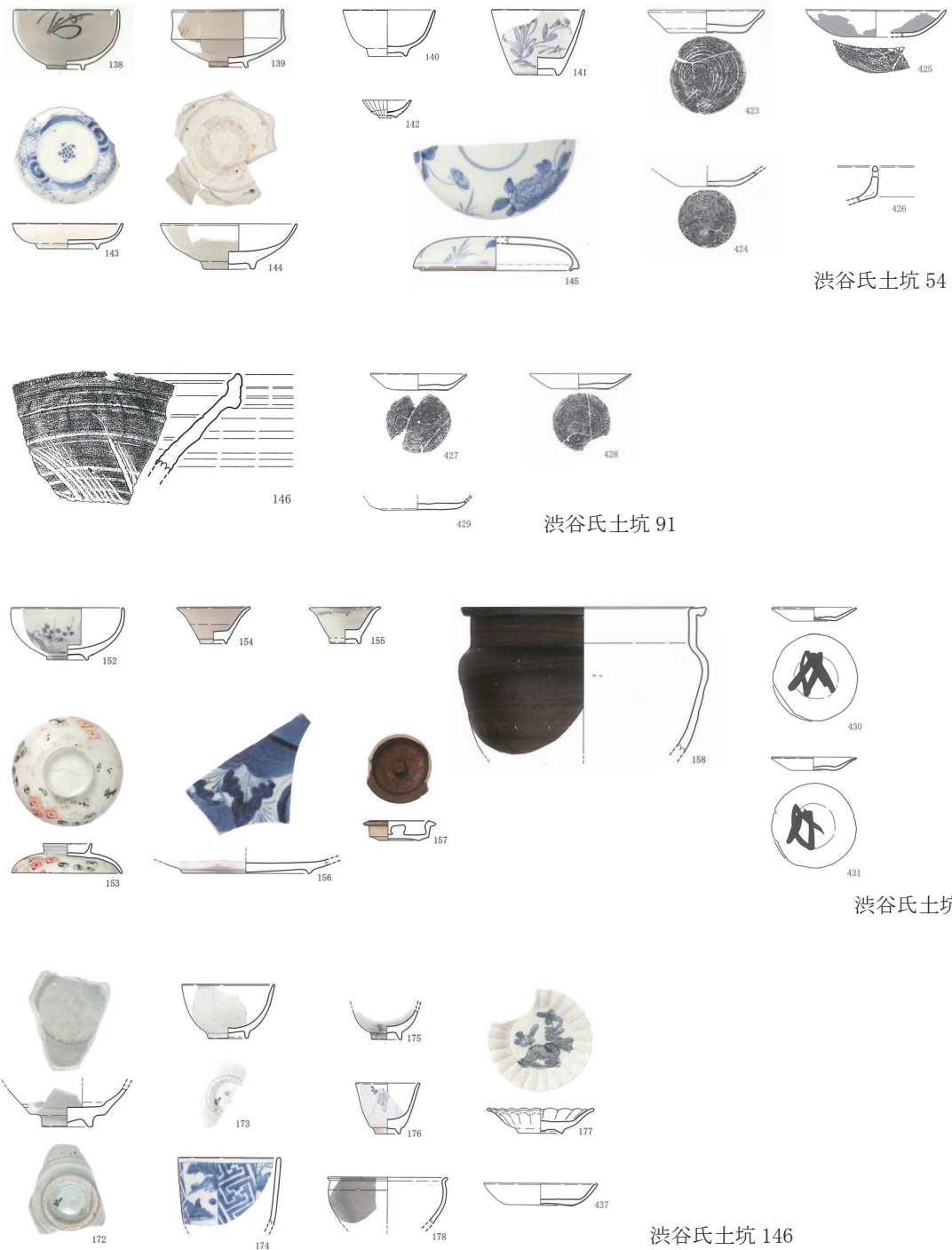


図3 佐土原城跡（第6次）出土遺物（S=1/6）

胎土も赤色粒子を含み中世土師器と類似する前者に対し、赤色粒子があまり見られず金雲母を多く含む土製人形や焙烙など他の近世土器類と類似する後者という差異が認められる。遺構の埋没過程や遺物の出土状況・残存度などからも、同時存在を検証することは難しい事例ではあるが、現時点では18世紀中頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑 91 は土坑 54 に切られており、土坑 54 よりも古いことが確定している。検出面からの深さは0.1～0.03 mと非常に浅く、その中から出土した備前焼播鉢1点、土師器小皿3点が報告書に掲載されている。備前焼播鉢は口縁帯が断面三角形に近いこと、放射状のスリメに斜

方向のスリメが付加されること、器面は暗赤褐色だが胎土は灰色に発色していることなどの特徴から、概ね17世紀第1四半期頃に位置づけられる(乗岡2000)。土師器小皿の法量は口径8.4～9.1 cm、底径5.1～5.6 cm、器高1.4 cmである。いずれも口縁部がほとんど残っておらず、残存状態は良くないが、掲載番号427・428は形態が類似し、底部はいずれも右回転糸切り底である。底径の大きい掲載番号429は器面の摩滅により不明瞭な部分もあるが、ヘラ切り底の可能性が高い。渋谷氏土坑54と同じく、同時存在を検証することは難しい事例ではあるが、現時点では17世紀初頭頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑121も検出面からの深さが0.11 mと非常に浅いが、報告書に掲載された出土状況では底面に接する遺物がほとんどなく、周囲から中央部に向かって流れ込んだような様相を示している。報告書に陶磁器類7点と土師器2点が掲載されているが、磁器ではやや粗雑な色絵が施された碗蓋や端反の小杯などが完形品である。陶器には口縁部の大半を欠くが、関西系の土瓶蓋などが含まれる。土師器はいずれも小皿で、完形品である。法量は口径7.35～7.4 cm、底径3.9～3.95 cm、器高1.2～1.3 cmである。底部は左回転糸切り底であり、墨で「中」と書かれている。胎土は赤色粒子が少なく、金雲母を多く含む。器壁は全体的に薄く、底体部間は内面が圈線状にくぼんでいる。特筆されるのは左回転糸切り底で、宮崎県内の資料としては極めて珍しい。この点や形態的特徴をふまえて検討したところ、江戸遺跡における18～19世紀頃の資料(小林1992)に類似するように思われた。年代的に幅を持つことが確実な事例ではあるが、完形資料の年代観を考慮し、現時点では18世紀後半～19世紀頃の様相を示す可能性がある資料群として捉えておきたい。

渋谷氏土坑146も検出面からの深さが0.09 mと非常に浅い。報告書に陶磁器類7点、土師器杯1点が掲載されている。磁器は祥瑞と呼ばれる明末の景德鎮窯産青花碗があるほか、肥前磁器の青磁碗や高台内に「太明」銘の碗、菊花形手塩皿、高台無釉の小杯などがあり、ほぼ1630～50年代に収まる(九州近世陶磁学会2000)。土師器杯は口径10.1 cm、底径5.9 cm、器高1.9 cmである。1/2弱の破片で焼成は非常に甘く、摩滅が著しいため調整等は判別できない。胎土には赤色粒子を多く含み、金雲母は僅かに見られる程度である。他の渋谷氏土坑と同じく、同時存在の検証は難しいが、掲載された陶磁器類の年代がよく揃うことから、土師器杯も同時期と想定し、17世紀第2四半期頃の資料群と考える。

#### (6) 中小路遺跡

宮崎市の北東部、大字島之内に所在する。近世初期には佐土原藩領であったが、1690(元禄3)年に藩主島津惟久が従弟島津久寿に島之内など三千石を分知し、以後は旗本領となった。発掘調査では近世の土坑や溝状遺構が検出されたが、そのうちの土坑9において土師器と磁器皿が一部重なった状態で出土し、地鎮など祭祀的な遺構の可能性も想定されている(宮崎市教委2019)。報告書には土坑9出土遺物として磁器1点、土師器5点が掲載されている(図4)。磁器は肥前産で、削り出し高台である。高台畳付以外は施釉され、内面に呉須で寿字文を三箇所描く。1640～50年代と想定される製品である(九州近世陶磁学会2000)。土師器のうち掲載番号8～10の小皿は口径8.1～8.9 cm、底径4.2～6.2 cm、器高1.4～1.9 cmで、明瞭な平底をなす10に対し、8は全体的に丸みを帯びており、9はそれらの中間的な形態である。底部はいずれも右回転糸切り底である。10は口唇部上面に沈線を施したかのように、溝状のくぼみが認められる。胎土は赤色粒子が多く、金雲母を僅かに含む。

本事例で注目されるのは掲載番号6・7の土師器である。外面には指頭圧痕が残るが、内面は

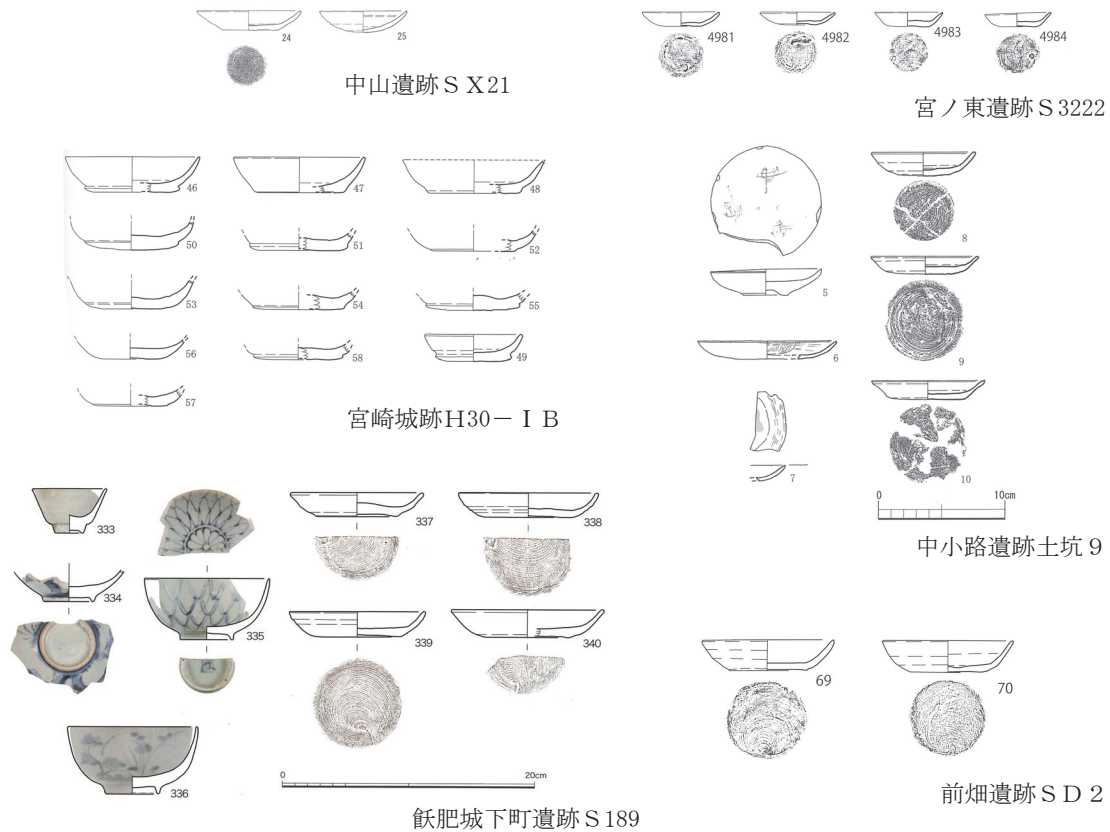


図4 各遺跡出土遺物 (S=1/6)

平滑で光沢すら帯び、7の内面には体部から口縁部にむかってナデ上げた痕跡が残るほか、口縁部のナデ調整に伴うと考えられる凹線が底部の周縁に巡る。器面は全体的に黒みがかったり、6にある新しい割れ面で見ると淡黄白色を呈しており、混入物をほとんど含まない精良な胎土である。6・7は特徴がよく似ており、同一個体の可能性もある。上記のような形態的特徴を備えているものとして京都の土師器皿が思い浮かぶが、仮に磁器皿の年代である1640～50年代を想定して近年の編年（平尾 2019）に照らした場合、器壁の厚みや体部～口縁部の形態に違和感もあり、これ以上の検討は今後の課題としたい<sup>(1)</sup>。報告書によれば、意図的に埋置された資料となるが、上記の点や各資料の残存度など検討を要する部分もある。現時点では磁器皿と在地の土師器小皿について、17世紀中頃に属する可能性が高い資料群と捉えておきたい。

#### (7) 宮崎城跡

南北朝期から近世初期にかけて存続した宮崎平野部の拠点城郭で、戦国時代末期には島津家老中の上井寛兼が居城としたが、1587（天正15）年の豊臣秀吉による九州征伐の結果、豊前国香春から縣（現在の延岡市）に移封された高橋元種が領有するところとなり、延岡藩の飛び地である宮崎の支配拠点となったが、高橋氏の改易、有馬氏の移封を経て、1615（元和元）年のいわゆる一国一城令により廃城となった。2017・2018（平成29・30）年度に遺構・遺物の保存状態確認を目的とするトレンチ調査が実施され、主郭に設定されたH30-1B調査区において造成面の上に土師器杯・小皿の集中出土が確認されており、うち13点の実測図が掲載されている（図4）。これらの土師器類には灯火具としての使用痕跡が見いだされず、献杯儀礼に伴う一括廃棄と推定されている。口縁部まで残存する4点のうち、杯は3点、小皿は1点で、残りの9点については杯と小皿の厳密な分類は難しい。法量は杯が口径10.3～11.1cm、底径7.0～7.6cm、器高2.65

～2.8 cmで、小皿が口径7.4 cm、底径6.0 cm、器高2.1 cmで、切り離し方法の明確な5点は全てへう切り底であり、その他に2点もへう切り底の可能性がある。造成面下の土中に瓦片が含まれることから、この造成を1587年以降と判断されており、それに伴い土師器類の帰属年代も1587～1615年に限定されている（宮崎市教委2020）。各個体の残存状況は良くないが、主郭の造成面上での集中出土であり、形態や法量の類似性も認められることから、同時使用・廃棄の可能性を有するものとして、16世紀末～17世紀初頭頃に属する資料群と判断する。

#### （8）飢肥城下町遺跡

日南市に所在する飢肥城は中世日向南部の拠点城郭である。築城年代は不明であるが、南北朝期に築城されたとの伝承があり、室町時代以降は伊東氏と島津氏の激しい抗争の舞台となり、近世には飢肥藩主の居城として存続した。調査地点は飢肥城に近接する標高約27 mの河岸段丘上にあたり、絵図との照合から近世段階には飢肥藩上級家臣の屋敷地であったと推定されている。発掘調査では礎石建物・池状遺構・井戸・土坑などが検出されており、そのうちのS 189とされる土坑から出土した磁器5点と土師器杯4点が掲載されている（図4）。出土遺物としてはその他に鉄製鎌や煙管の吸口があった。S 189は直径1 m程度の円形プランで、全体を検出面から約0.3 mの深さまで掘削した後に、西側の一部のみ柱穴状に深さ約1.1 mまで掘り込んでいるが、周囲に同規模の遺構がなく、建物の柱穴にはならない。このような遺構の状況に加え、遺物の残存度などから地鎮に関係する遺構と推定されている（宮崎県埋文セ2012）。

磁器は肥前産と考えられる外面二重網目文、内面網目菊花文、高台内渦福銘の丸碗のほか、厚手でやや灰色がかかった素地の染付丸碗や白磁小杯などがあり、概ね18世紀代と考えられそうである。土師器杯のうち掲載番号339は完形で、他の3点は1／2あるいはそれ以下の残存である。法量は図上の計測によるが、口径10.3～11.9 cm、底径6.4～6.8 cm、器高1.9～2.2 cmで、切り離し方法の明確な3点は右回転糸切り底である。胎土は掲載番号337・338が赤色粒子をほとんど含まず金雲母に富み、同339・340には金雲母はあまり見られないが赤色粒子も少ない。

報告書では地鎮関係の遺構と推定されているが、掲載番号339以外は残存状態が良いとは言えず、意図的な配置があったなどの根拠が無い限り、使用・埋置の同時存在は認定しがたい。ただし、埋土は2層に分かれるのみで、自然埋没とは考えづらいため、廃棄行為の時間幅を広くとる必要はない。よって、現時点では18世紀頃に属する可能性が高い資料群と捉えておきたい。

#### （9）前畑遺跡

日南市の市街地から西方へ約8 km、串間市との境に近い山間部に所在する。近世段階は飢肥藩領であり、平部嶺南の『日向地誌』によると、飢肥の真言宗願成就寺の末寺である長禅寺があったが、1872（明治5）年に廃寺になったとされる。発掘調査では溝状遺構による区画の内部に墓坑と考えられる土坑が多数検出され、溝状遺構の埋土から五輪塔の残欠も出土している（宮崎県教委1990、宮崎県埋文セ2014）。SD 2とされる土坑から完形の土師器杯2点が出土した（図4）。

土師器杯の法量は図上の計測によるが、口径10.2～10.3 cm、底径6.0～6.4 cm、器高2.4～2.5 cmである。底部はどちらも右回転糸切り底である。墓坑から出土した六道銭は洪武通寶や寛永通寶であり、発掘調査区外にある石塔群には1662（寛文2）年～天保年間（1830～1844年）にわたる紀年名があったとのことであり、近世を通じて営まれた墓地と考えられる。SD 2出土の土師器杯は完形品であり、報告書に記載された出土状況からも副葬品として埋置されたことは確実であるが、出土遺物が土師器以外になく、帰属年代を推定することが困難である。



### 3 若干の考察

前節で9遺跡12遺構の近世土師器出土事例を紹介した。冒頭で述べたように編年を検討する段階には至っていないが、現在までに把握できた資料から読み取れることを整理したい。まずは各事例のうち、前畑遺跡例を除く11遺構について推定した時期順に並べると以下ようになる。

- 16世紀末～17世紀初頭 宮崎城跡H 30－1 B
- 17世紀初頭 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 91
- 17世紀第2四半期 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 146
- 17世紀中頃 中小路遺跡土坑 9
- 17世紀後半 延岡城内遺跡（第3次）土壙 4
- 18世紀前半 中山遺跡S X 21
- 18世紀代 飢肥城下町遺跡S 189
- 18世紀中頃 延岡城内遺跡（第39－2次）トレンチ2廃棄土坑
- 18世紀中頃 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 54
- 18世紀後半～19世紀 佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 121
- 18世紀後葉以降 宮ノ東遺跡S 3222

最も古く位置づけられる宮崎城跡H 30－1 Bは拙稿（堀田 2016）の第XⅡ期に属する。報告書で指摘されているとおり、体部が直線的に立ち上がる器形と、緩やかに内湾しながら立ち上がる器形が併存していることが新たに判明した（宮崎市教委 2020）。宮崎城跡例が杯と小皿の2器種に分かれているため、拙稿で予測したように直線的な器形の小皿も存在する可能性が高い。この段階では回転糸切り底の個体を確認できていない。そして、佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 91ではヘラ切り底と回転糸切り底の個体が併存しており、17世紀中頃～後半の中小路遺跡土坑 9と延岡城内遺跡（第3次）土壙 4では、確認できるものは全て回転糸切り底である。ヘラ切りから糸切りへの転換が17世紀前半頃に進行したと考えられる。18世紀中頃の佐土原城跡（第6次）渋谷氏土坑 54では、底部から口縁部まで厚さがほとんど変わらず、底体部間の屈曲が明瞭ではない新たな器形が出現しており、ほぼ同時期かやや後出の延岡城内遺跡（第39－2次）トレンチ2廃棄土坑でも類似する器形の土師器杯・小皿が主体をなしている。これらは器形のみならず、胎土に金雲母を多く含む点も前代と異なっている。法量については、時代が下るにつれ縮小化の傾向が認められそうであるが、より多くの個体による詳細な分析を必要とする。また、18世紀後葉以降は現時点では明瞭な杯が確認できておらず、小皿は著しく小型化している。この段階には施釉された土師器もみられるが、胎土からは在地生産の可能性も想定できる。

上述した諸変化については、小藩が分立している日向の場合、地域差が看取できそうなものであるが、今のところはむしろ地域を超えてシンクロしているようにも思われる。この点をふまえ、生産体制や供給範囲の検討を進めたい。また、変化の背景としては用途や競合商品の問題も検討すべきであるが<sup>(2)</sup>、本稿の検討はそこまで及ばなかった。

## 謝辞

宮崎市教育委員会の秋成雅博氏には、資料調査に対応いただき、佐土原城跡の調査所見についても貴重な御教示を賜った。文末ではあるが、記して感謝申し上げたい。

## 註

(1) なお、本遺跡ではこの他にも京都産の可能性のある土師器が出土しており（報告書掲載番号 33）、さらには明らかに在地の胎土を用いているが、京都系の製作技術による手づくね土師器（同 16・30・32・34・35）もあり、それらを含めた検討が必要と考えている。

(2) 報告事例の多くに油煙が付着しており、近世段階には主に灯火具として使用されたと考えられる。

## 引用・参考文献

- 小川 望 2001「灯火具 1 油皿」『図説 江戸考古学研究事典』、柏書房、338～339 頁
- 九州近世陶磁学会 2000『九州陶磁の編年』
- 小林謙一 1992「皿形土器類」『江戸在地系陶磁器・土器の諸問題』、江戸陶磁土器研究グループ、106～131 頁
- 鈴木裕子 1999「京焼出土資料の変遷」『京焼—消費地出土の様相—』、関西近世考古学研究会・考古フォーラムとくしま、35～56 頁
- 鈴木裕子 2001「江戸遺跡出土の信楽焼」『近世信楽焼をめぐって』、関西陶磁史研究会、128～139 頁
- 乗岡 実 2000「備前焼播鉢の編年について」『第3回中近世備前焼研究会資料』、中近世備前焼研究会、61～69 頁
- 畑中英二 2003「信楽焼の編年と技法」『信楽焼の考古学的研究』、サンライズ出版、49～77 頁
- 平尾政幸 2019「土師器再考」『洛史』研究紀要第12号、公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所、9～150 頁
- 堀田孝博 2012「宮崎平野部における平安時代の土器について—土師器供膳具を中心に—」『宮崎考古』第23号、宮崎考古学会、55～78 頁
- 堀田孝博 2016「宮崎平野部の中世土師器」『宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ』、宮崎考古学会、35～44 頁

## 報告書一覧

- 大分県教育委員会 1996「机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群」『九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)』
- 延岡市教育委員会 2002「延岡城内遺跡Ⅰ」『延岡市文化財調査報告書』第26集
- 延岡市教育委員会 2017「市内遺跡」『延岡市文化財調査報告書』第56集
- 宮崎県教育委員会 1990「前畑遺跡（長禅廃寺墓地推定地）調査報告」『宮崎県文化財調査報告書』第33集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2004「中山遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第93集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2008「宮ノ東遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第173集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2012「飢肥城下町遺跡」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第220集
- 宮崎県埋蔵文化財センター 2014「置県130年記念 埋蔵文化財資料活用推進事業報告書」『宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書』第232集
- 宮崎市教育委員会 2016「佐土原城跡第6次調査」『宮崎市文化財調査報告書』第109集
- 宮崎市教育委員会 2019「中小路遺跡」『宮崎市文化財調査報告書』第127集
- 宮崎市教育委員会 2020「宮崎城跡」『宮崎市文化財調査報告書』第132集